

巻頭言

災害サイクルを踏まえた減災
としなやかな対応（危機管理）

今村文彦



我が国は4つのプレート境界に位置し、しかも台風
の来襲を受けやすい中緯度にある島国である。世界で
の自然災害の殆どがここで発生し、しかも、頻度・規
模共に大きいことが特徴である。昔から、我が国の地
域・生活基盤整備においては、治水や治山などの防災
対策がその中心であった。中でも明治の中頃には、大
規模洪水、大地震・津波などが頻発し、当時の政府は
体制の整備だけでなく、西洋科学・技術を導入した本
格的な対応を迫られた。これ以降に多くの防災関係の
法律の下、防災体制が整っていった。現在は、世界で
もトップクラスの防災体制と技術を保持していると言
える。

しかしながら、現在においても自然災害による被害
は繰り返し受けており、自然システムの中で活動して
いる人類にとって永遠のテーマであり克服不可能かとも
思われる。なぜ、イタチごっごのように被害を受けて
からの対応（対処療法）に留まってしまうのか？なぜ、
過去の経験・教訓が生かされず（災害文化の喪失）
に同じような被害を受けてしまうのか？なぜ、最近、
地球規模的な災害が増加しているのか？その中で、国
際的な協力が不可欠であるが、どうして受け入れない
体制があるのか（国際防災戦略の不備）？なぜ、被害
の実態把握が遅れてしまうのか？多くの抜本的な課題
が残されている。

これらの課題に対して、我々は現在の取組みを今一
度見直し総合的で継続的な内容に展開しなければならない。
将来における国土の保全のみならず、アジア・
世界での安全向上に努力しなければならない。なぜなら
ば、21世紀を迎えた現在は、巨大災害の時代に入
っているからである。国内での大災害は世界経済を揺
るがし、国外での災害は、国内の生産活動や生活に影
響を与える。

その中で、著者が考える新しい取組みのキーワ
ードを2つ挙げるとすると、災害サイクルを踏まえた減災

（ミティゲーション）としなやかな対応を軸とした危
機管理である。

前者においては、被災直後の復旧・復興は次の災害
の備え（予防）になることの認識が重要である。そこ
では、現状復旧ではなくより強いまちづくりの視点も
持った復興を考えなければならない。また、減災は、
災害発生時から元の暮らしに戻るまでの全体の被害を
軽減することであるので、より早い回復を見据えた基
盤づくりも必要であろう。災害サイクルを踏まえた減
災は、時間の流れの中で、よりよくなる正のスパイラ
ルを創るため、各フェーズでの対策を総合に組み合わ
せることになる。その際に、社会基盤の整備は不可欠
である。

後者についての「しなやか」は、少子高齢化、予算
規模の縮小、施設の老朽化など現在の社会的背景を踏
まえるまでもなく重要である。一見、言葉としてか弱
そうに思えるが、竹のような弾力性を持っているもの
とご理解いただきたい。真正面で、外力に対抗するの
ではなく、自分自身を柔軟に対応させながら、受ける
力を最小限にする考えである。この「しなやか」とい
う言葉は、一昨年出された国土審議会計画部会国土基
盤専門委員会の中間とりまとめにもある。その中では、
「災害に強くしなやかに国土を支える国土基盤」を謳
っている。起こり得る自然災害の形態を的確に想定し
高度な防御水準を効率的で迅速に確保するとともに、
万一の中核機能の途絶に備えた迂回ルート等の確保を
通じたりダンダンシーの強化を図る。広域的な行政・
コミュニティの連携による広域防災・危機管理体制の
構築を通じて、自助・共助・公助のバランスのとれた
総合的な防災・減災対策を実施する。植生を利用した
外力低減のバリア設置など、重要な内容が列挙されて
いる。

—いむら ふみひこ

東北大学大学院工学研究科附属災害制御研究センター—